

〈特別活動〉

自己有用感を高める学級活動の工夫

— 主体的に話し合い、自己を生かす係活動を通して（第4学年） —

沖縄市立高原小学校教諭 比 嘉 正 彦

I テーマ設定の理由

子どもたちを取り巻く現在の社会状況は、情報化、都市化、核家族化などめまぐるしく変化し、様々な生活体験の不足や人間関係の希薄化が指摘されている。それに伴い、規範意識や働く意欲の低下、自分の生活と結びつけて物事を熟考する力や話し合って課題を解決する力の低下など、多くの課題が挙げられる。このようなことから、「人の役に立った」「人から感謝された」「人から認められた」といった「自己有用感」を高め、社会性を身に付けることが求められる。小学校学習指導要領解説―特別活動編（以下「解説特別活動編」と略す）には、特別活動の基本的な性格として「望ましい集団活動や体験的な活動を通して、実際の社会で生きて働く社会性を身に付けるなど、児童の人間形成を図る教育活動」とある。また、特別活動の目標には、今日的な課題から「人間関係」や「自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う」ことが明記された。このことから、特別活動において自己有用感を育むことは重要であると考ええる。また、学級活動においては、自治的な活動の上に他者と関わり、一人一人がもつよさを発揮したり、それを他者が認め受け入れるような活動が望まれる。

これまでの学級活動を振り返ってみると、各学年の発達に即した系統的な指導が十分でないと感じた。係活動においては、計画から実践の流れに沿った仕事をしっかり行うことはできた。しかし、自分の特徴に気付き、よいところを伸ばし集団の中で生かそうとしたりする機会が少なかった。また、話し合い活動においては、必要なスキル指導に重点を置いていたため、話し合いの必要性や一連のサイクルは身についた。しかし、発言が一部の児童に偏り、一人一人の意見を交流させることが不十分であった。更に、異なる意見にも耳を傾け公平に判断したりする態度や、楽しい学級生活をつくるために、折り合いを付けた集団決定ができるような適切な指導が不十分であった。このことから、話し合い活動における系統的な指導と、指導内容の重点化を図る必要性を感じている。

そこで、「解説特別活動編」における「発達の段階に即した指導のめやす」をもとに指導の在り方を見直す。対象学年4学年（以下中学年）の係活動の指導として、「低学年までの経験を生かして、創意工夫を加えて活動に取り組めるようにする」とある。また、話し合い活動においても、「異なる意見にも耳を傾け、公平に判断したりして、折り合いを付けて集団決定できるように適切な指導が大切である」と述べられている。このことから、協力し合って楽しい学級生活をつくるため、児童の創意工夫が生かされるような係活動を実践させたい。そのためには、係活動における「課題の共有」「計画」「実践」「振り返り」のサイクルの中で意図的な話し合いを設定する。話し合いを通して、学級における諸問題に気付き考え、問題の解決に向け意見を交流させることができると考える。

そこで本研究では、係活動を通して学級における生活上の諸問題に児童自らが気付き、考え行動を起こす主体的な児童の姿を目指す。その基礎となるのが話し合いであり、話し合いでは全員で課題を共有し、その課題を解決するための方法について一人一人が主体的に考え集団決定する。それが、役割を自覚し自己を生かす係活動に繋がり、協働的な活動を通して問題解決を成し遂げたとき、自己有用感が高まるのではないかと考える。

〈研究仮説〉

係活動を中心とした学級の生活づくりの場において、課題を共有し解決に向けた主体的な話し合いをさせることによって、役割を自覚し自己を生かす係活動ができるようになり、自己有用感が高まるであろう。

II 研究内容

1 自己有用感とは

国立教育政策研究所が配布している、生徒指導リーフ（Leaf18）によると、「自尊感情」とは、一般的には「自己肯定感」「自己存在感」等とほぼ同じ意味合いで用いられ、自己評価が中心である。それに対し「自己有用感」とは、人の役に立った、人から感謝された、人から認められた、という自

分と他者（集団や社会）との関係を自他共に肯定的に受け入れることで生まれる、自己に対する肯定的な評価としている。そこには、他者の存在が前提となり、他者からの評価やまなざしを感じた上でなされる。人とうまく関わる「社会性」やきまり等を進んで守ろうとする「規範意識」を育む面からも、特別活動において「自己有用感」の育成は意義あるものといえる。

「楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動小学校編」（国立教育政策研究所教育課程研究センター）によると、「特別活動の充実で自己有用感を育むことにつながります」とある。指導のポイントとして、例えば、系の活動計画に沿って自分の役割をやり遂げたときの友達からの肯定的な評価など「仲間から必要とされている」や「自分も役に立っている」ことを実感できるように工夫することを挙げている。

また、杉田義作（1985）は、「人間は、所属する集団のメンバーから、私も必要な人間だと思われているという『主観』（自己有用感）が持てなければ、その集団の中で心理的に安定した生活はできない」と述べている。また、杉田は「学級経営は、望ましい集団づくりを目標にするものである。したがって、子どもどうし相互理解を深めたり連帯を強めたりして『愛情の欲求』を満たしてやることと自己有用感を高めるなどで『所属の欲求』を満たしてやるなどの観点を持つ学級経営に、もっと力を入れることが大切である」述べている。このことから、特別活の目標である「望ましい集団活動」「自主的、実践的態度」「自己を生かす能力」等を育む上でも、自己有感の存在は必要不可欠といえる。そこで、本研究では図1に示すように係活動を通して、自己有用感を高めていきたいと考える。

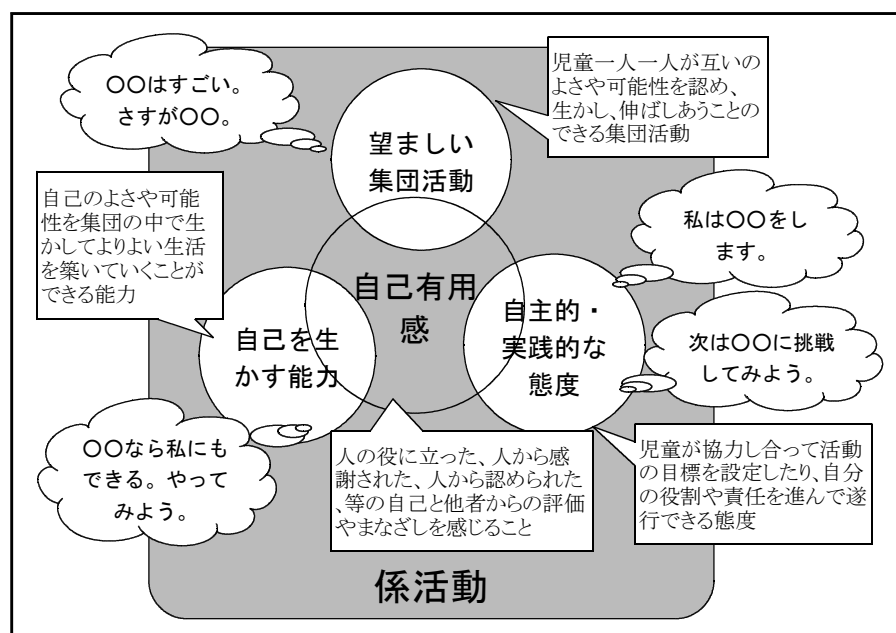


図1 自己有用感を育む係活動

2 係活動について

(1) 係活動の意義

学級活動の一つの活動内容である係活動は、子どもたちが学級内の仕事を分担処理するために、自分たちで組織を作り、自主的・主体的に活動するものである。有村久春（2003）は、「その活動体験を通して、係活動の意義を理解したり、系のメンバーと協力して活動を進める協働体験をしたり、自分の役割を学級生活の中で表現する役割意識を持ったりすることから、自分のよさや成長を実感するものである」と述べている。つまり、係活動の充実とは豊かな学校生活をつくる基盤にもなる。したがって、教師自らが設定するものではなく、子ども自らが学級の一員として存在するために、何らかの役割を担い、それを果たしていききたいとする内発的な欲求による「意義理解」が重要視される。そのためには、子どもの心に、活動を通して「楽しい」「役に立つ」「みんなが喜んでくれる」等の情動的な感覚が育っていくことが大切である。このような感覚を子どもたちが抱いていくために、教師自身が係活動について表1に示すような認識をもち、集団活動のよさを理解しておく必要がある。特に③と④は本研究の主に関わりの深いものと考えられる。計画的、継続的な活動の中に全員から理解され認められたり、メンバー相互の意見交換や協働的な活動を通して特別活動の目標でもある「よりよい人間関係」を築い

表1 教師がもつべき係活動への認識（有村）

- ① 係活動は、子どもたちの学級生活のためにある。
- ② 活動そのものが成長である。
- ③ 学級に貢献しみんなから理解され認められる活動である。
- ④ メンバー相互の意見交換や相互協力が必要になる。

ていきたい。

(2) 係活動における話し合い

「解説特別活動」には中学年の指導として「低学年までの係活動の経験を生かして、創意工夫を加えて活動に取り組めるようにする」とある。また「それぞれの係がその活動を独自に進めるだけでなく、活動の計画や悩みなどを学級会の議題として、お互いの意見や希望を聞くようにして、係活動の改善に取り組めるようにする」ことが大切とある。つまり、係活動とは、学級における生活上の諸問題を解決したり、生活の向上と密接な関係があると言える。

本研究において、図2で示すように係活動における話し合いを「課題の共有」「計画」「実践」「振り返り」の4つの場で行わせ、話し合いを通して個々の役割意識と集団における協働意識の高揚を図りたい。それが、自己を生かす係活動に繋がると考える。

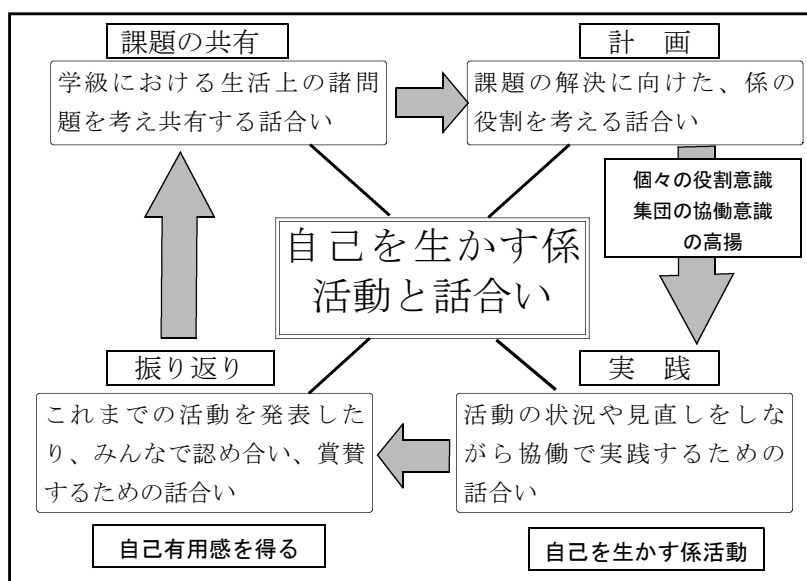


図2 自己を生かす係活動と話し合いのサイクル

3 話し合い活動について

(1) 話し合いの指導

「解説特別活動」には中学年の指導として「話し合い活動の計画を作成する計画委員会を設け、これらの役割を十分に指導しながら、少しずつ話し合いが自主的にできるようにしていくことが望ましい。計画委員会は輪番で担当し、教師が助言しながら、全員が経験できるように配慮することが大切である」また「異なる意見にも耳を傾け、公平に判断したりして、楽しい学級生活をつくるために折り合いを付けて集団決定できるように適切な指導をすることが大切である」とある。また、「楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動小学校編」によると「学級会とは、自分もよくてみんなもよいと思うことを折り合いを付けて集団決定する集団討議です。したがって、集団決定するに当たっては、少数意見にも耳を傾け、それらを生かす方法を考えることができるようにします」とある。そして、解決に向けた集団決定を「折り合いを付けるための三つの条件」として示している（表2）。

ここでは、多数の発言が予測される「お楽しみ会を計画しよう」の話し合い活動を取り上げ検証を行う。児童は、輪番制で決まった計画委員会を中心に話し合いを進めていき、事前に学級会ノートを活用し、自分の考えを明らかにして話し合いに参加させる。そこで、多数の意見の中からよりよい方法を自分たちで見つけ、解決に向けた集団決定ができるよう表2の「折り合いを付けるための3つの条件」を踏まえ、自分たちで意見をまとめたり、決めたりする話し合いを進めさせたい。

表2 折り合いを付けるための3つの条件

- ①提案理由がまとめるための根拠になっている。
- ②まとめるための条件が明らかになっている。
- ③まとめるまでの道筋のイメージが共有化されており、児童はまとめるための意見を言うことができる。

(2) 主体的な話し合いとは

特別活動の目標には「集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的・実践的な態度を育てる（一部略）」とある。この「自主的・実践的な態度」とは、「解説特別活動」によると、「児童自身が意識して努力したり、自ら高めたり、伸ばしたりすることができるようにする態度」を示している。また、「活動内容も児童が協力し合って活動の目標を設定したり、自分の役割や責

任を進んで遂行したりするとともに、個々の児童が実際に直面する諸問題への対応や解決の仕方などを実践的・体験的に学ぶ活動で構成されている」とある。このことから、図3に示すように「主体的に話合う児童」とは、個々の児童が問題意識をもち、それを集団の一員として共有し、課題解決に向かって本気で考え意見を出し合う姿と捉える。更に、少数意見にも耳を傾けたり、相手のよさに気付く態度も含まれている。多くの考えや意見の中から、よりよい方法を練り合いながら生み出し、折り合いを付けた集団決定ができ、問題の解決に向かう具体的な行動がイメージできる話し合いを「主体的な話し合い」と捉える。

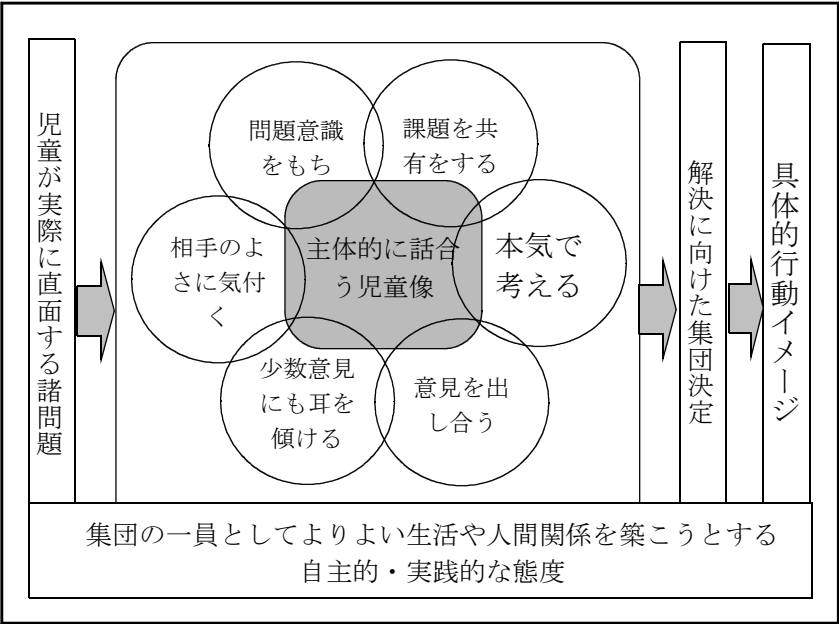


図3 主体的な話し合い

4 ホワイトボードの活用

課題を共有し一人一人の考えを表出させるためホワイトボードの活用を試みる。小学校でホワイトボードを活用している実践として岩瀬直樹（2011）らによる「ホワイトボードミーティング」が挙げられる。岩瀬によるとホワイトボードを使うことのメリットは、「気軽に消せる安心感があり間違いを気にせず話せるとしている」また、「思考を筆記させることで議論の可視化や他者理解にも繋がる」としている。ここでは、これまで不十分とされた課題の共有と意見の交流を改善するためにホワイトボードを活用した話し合いを試みる。「係活動パワーアップ作戦」では、各係に分かれて話し合いを行う。まず初めに、ホワイトボードをグループの中央に置き全員が見える状態にする。図4に示すように、課題はしっかり共有されるように中央に書く。次にホワイトボードを人数分で仕切り、一人一人が考えている意見を書きながら声に出し合う。次に、赤色のマーカーを使い出された意見を交流させながら、よりよい方法を練り合いながらまとめていく。

このようにして、ホワイトボードを活用した話し合いによって、これまで発言意欲の低かった児童が、思考の可視化によって他者の意見が理解しやすくなり、それに伴って、自分の意見も表出しやすくなると期待できる。それが、課題の解決に向けた主体的な話し合いに繋がると考える。

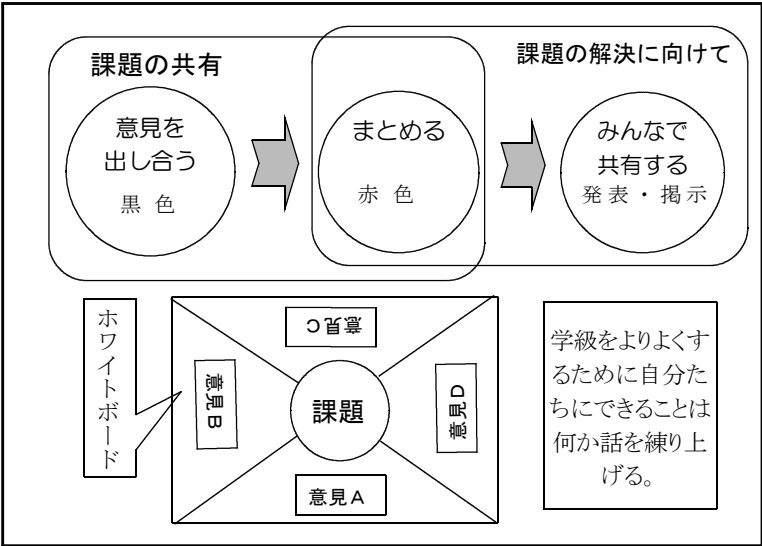


図4 主体的な話し合いに繋げるホワイトボードの活用

Ⅲ 指導の実際

本研究では、学級活動における係活動を中心とした実践を通して、人の役に立った、人から認められたなどの思いを味わい、自己有用感の高まりが児童に見られたか検証を進める。また、係活動と連動して話し合いのサイクルを取り入れることで自己を生かす係活動に繋がったか検証する。検証授業は、ワイ

ドを活用した話し合い（検証1、3）と学級全員で行った話し合い（検証2）の3回が行われた。

1 検証の計画

過程	期日	授業	朝の会	放課後	○活動内容 □指導上の留意点	評価の観点と評価規準
共有課題	10/26	◎			議題「2学期の係を決めよう」 ○新しい係とメンバーを決める。 □1学期の反省を踏まえて、新しい係を決める。	【関心・意欲・態度】 学級をよくするために進んで話し合いに参加できたか。
計画	10/27			◎	○係のめあてと活動内容を話し合い表記する。 □係紹介コーナーに掲示し意識させる。	【関心・意欲・態度】 進んで話し合いに参加できたか。
実践	10/28～			◎	○係のめあてや活動内容に沿って活動する。 ○帰りの会で発表の機会をつくる。 □必要に応じて助言・賞賛する。	【思考・判断・実践】 学級生活の向上に役立つ活動を考え、協力し合って実践しているか。
	12/1	◎			○ホワイトボードの使い方に慣れよう。 □ホワイトボードの使い方と話し合いの方法を指導する。	【思考・判断・実践】 ホワイトボードに慣れることができたか。
振り返り	12/8 検証1	◎			議題「係活動パワーアップ作戦」 ○これまでの活動の見直しをする。 ○これからの活動の計画をたてる。 □ホワイトボードを活用して話し合わせる。	【知識・理解】 改善点やこれから何をすればよいか理解できたか。
実践	12/9～		◎	◎	○見直した内容や計画に沿って活動する。 ○帰りの会で発表の機会をつくる。 □必要に応じて助言・賞賛する。	【思考・判断・実践】 学級生活の向上に役立つ活動を考え、協力し合って実践しているか。
計画	12/18 検証2	◎			議題「お楽しみ会を計画しよう」 ○男女の仲がもっとよくなる会を計画する。 □一斉型の話し合いで折り合いを付けた集団決定ができるようにする。	【関心・意欲・態度】 学級をよくするために進んで話し合いに参加できたか。
実践	12/25	◎			集会活動「お楽しみ会」 □各係でお楽しみ会の役割を分担し、楽しい会にする。	【思考・判断・実践】 創意工夫し、協力し合って実践しているか。
振り返り	1/7		◎		○よかった点や改善点をふり返しシートに記入し全体で共有する。	【知識・理解】 改善点や次はどうすればよいか理解できたか。
計画	1/8 検証3	◎			議題「3年生に係活動をしようかいしよう」 ○何をどのように紹介するか話し合う。 □ホワイトボードを活用して話し合わせる。	【関心・意欲・態度】 紹介の内容を理解するために、進んで話し合いに参加できたか。
実践	1/14	◎			集会活動「3年生に係活動をしようかいする会」 ○係の大切さや楽しさを3年生に伝える。 □各係で発表や会の進行・運営を担当させる。	【思考・判断・実践】 自分の頑張りや友達のよさに気づき伝えることができたか。
振り返り	1/15		◎		○よかった点や改善点をふり返しシートに記入し全体で共有する。	【知識・理解】 改善点や次はどうすればよいか理解できたか。

2 検証授業1

(1) 議題 「係活動パワーアップ作戦」

(2) 目標

- ① 話し合いに参加し、自分の考えが表出でき、友達の考えのよさに気付くことができる。
- ② 話し合いで決まったことを理解し、自分が何をすべきか理解することができる。

(3) 議題選定の理由

本学級では、一学期の反省のもと、二学期に新たな係編成を児童自らが話し合いで決めた。しかし、実質的には一学期の延長上で構成メンバーは異なるが、仕事内容については決まった仕事をこなす

ている状況である。係と当番の違いは理解しているが、何をどのようにすればよいのか、しっかり話し合って計画を立てる必要がある。児童自らが学級の生活づくりをよくしていくための係活動として捉え、一人一人のよさが生かされる創意工夫された係活動になって欲しいと考え本議題を選定した。

(4) 展開

	話合い順序	指導上の留意点	目指す児童の姿と評価方法
導入 5分	1 始めの言葉 2 計画委員の紹介 3 議題の確認 4 提案理由やめあての確認 5 先生のお話し	・意欲を持たせるために元気にあいさつさせる。 ・学級会ノートの記述に沿ってスムーズに進めさせる。 ・提案者の思いを全員が理解できるように事前に指導する。	・計画委員会の仕事の内容や計画的な話合いの進め方を理解している。 〈観察・計画委員会ノート〉
展開 20分	6 話合い ①何のために（目的） ②何をどうする （具体的な計画を立てる）	・学級の課題を黒板で確認させる。 ・担当が所定の場所にホワイトボードを取りに行く。 ・各係でホワイトボードを活用しながら話合いを進めさせる。 ・決まったことを画用紙に記録する。 ・時計係は、タイマーでめやすの時間を知らせる。	・よりよい学級の生活づくりに向けて考え、判断し、まとめようと話し合っている。 〈観察・学級会ノート〉
終末 20分	7 決まったことの発表 8 話合いの振り返り 9 先生の話 10 終わりの言葉	・各係で決まったことを発表させ、学級全体で共有し活動意欲を持たせる。 ・よかった点や課題について自己評価するとともに、友達のよかった点などについても相互評価ができるように助言する。 ・学級全体を考えた意見を賞賛すると共に実践の意欲化を図る。また、計画委員へ励ましの言葉を贈る。	【知識・理解】 ・これから自分が何をすべきか理解している。 ・話合いを振り返り、相手のよさにも気付こうとしている。

3 仮説の検証

本研究では、仮説に基づき3回の検証授業と係活動の実践を行ってきた。話合い活動では、児童が主体的な話合いができたのか検証する。また、係活動では常時活動と集会活動を通して、自己の役割意識と協働的な活動の場面から自己を生かす姿が見られたか。更に、他者との関わりから児童の自己有用感はどのように高まったのか検証する。

(1) 主体的な話合いはできたか

主体的な話合いとは、図3に示した6つの条件を総合的に含んだ話合いと捉えた。そこで、「課題の共有と意見の交流」「解決に向けた集団決定」に視点を置き、児童の話合いの様子、感想、発表記録から主体的な話合いについて検証する。

① 課題の共有と意見の交流について

これまでのグループでの話合いは、発言が一部の児童に偏り、一人一人の考えを交流させることが不十分であった。それを改善するためにホワイトボードの活用を試みた。写真1は、「係活動パワーアップ作戦」の話合いの様子である。5名の児童がグループになりホワイトボードを囲んで一人ずつ考えを書きながら発表していく。その際、課題を共有させ問題意識をもたせるためにホワイトボードの中央に議題を書かせて、話合いを進めさせた（写

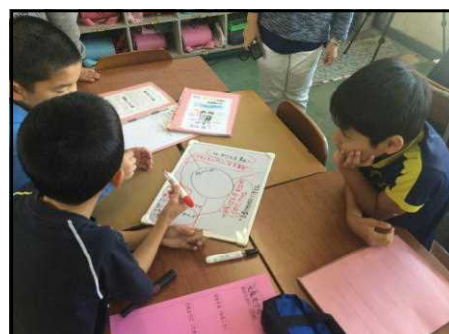


写真1 ホワイトボードを活用した話合い

真2)。児童は、全員が意見を出し終えた段階で赤色のマーカーを使って意見をまとめた。まとめた意見は色画用紙に書き写し、学級全体で共有するためにみんなの前で係の代表が発表した（写真3）。

検証授業では、メンバーが最初、黒色のマーカーで自分の考えを書いた後、目を見合わせながらホワイトボードに記入されたことをもとに、声に出しながら意見を発言していた。これまで発言意欲の低かったJ、M、Rが、この話合いで表3のような具体的な意見を係のメンバーに提案していた。これは、これまでの話合いでは見ることのできなかった変容である。続いて、話合いをまとめる段階では、赤色のマーカーを使って意見に印を付け、対話しながら話をまとめる姿が見られた。

他の児童の授業後の感想にも「友達と意見がかみあわない子もいたけど、次やるのがきまったのでよかったです」「ちゃんと話合いができてとてもうれしかったです。役割を決めたのでしっかりと守って頑張りたいです」など今後の活動に向けた前向きな記述があった。このように、「係動パワーアップ作戦」での話合い活動において、ホワイトボードを活用することで、児童は課題に対して全員で理解し、積極的に意見を出し合う姿が見られた。

表3 ホワイトボードで出された意見

給食係J：放課後、給食エプロンを番号順にキレイに並べる。
メモ係M：兄弟学級の友達のために時間割のメモを書いて知らせる。
行事係R：やりたいことベスト3を作って教室にかざる。



写真2 ホワイトボードの活用例



写真3 全体で共有

② 解決に向けた集団決定について

多くの考えや意見の中から、よりよい方法を練り合いながら生み出し、折り合いを付ける集団決定ができたのか検証する。議題「お楽しみ会を計画しよう」では、提案理由を「男女の仲がもっとよくなるためにお楽しみ会をひらきたいから」として4人の計画委員会を中心に全員が机をコの字型に配置し向き合って話合いを始めた（写真4）。事前に考えた内容を黒板に書きだし、多くの意見の中から5つに絞り込むことになった。表4は、その時の発表記録である。Tはお楽しみ会にビデオ鑑賞をしたいと意見を出した。周りの児童も拍手をし同意の意思表示が出た。その後、Jは議題の提案理由に合わないとして 反対意見を出した。それを聞いた、SもJと同じ意見を出して反対を示した。その結果、学級全員が同意のうえで今回はビデオ鑑賞を取り下げることになった。これは、表2で示した折り合いを付けるための3つの条件の内の1つ「提案理由がまとめるための根拠になっている」に合致している。

折り合いを付ける集団決定に至る話合い活動においては、自分の提案が採用されないこともある。児童はそのような場合をどのように受け止めているだろうか。Kの様子を検証する。Kは当初お楽しみ会で「フルーツバスケット」がしたいという考えをもって学級会に臨んだ。しかし、話し合いの結果、採用されず別のゲームに集団決定された。表5は、話し合いの後のふり返りシートに書いたKの感想で



写真4 お楽しみ会を計画しよう

表4 「お楽しみ会を計画しよう」の記録発表

T：「人気アニメのDVDが観たいです。理由は、みんなが楽しめるからです」
全員：拍手で賛成の意思を表す
J：「DVD鑑賞はない方がいいと思います。DVDは観るだけなので男女仲良くならないと思うからです」
S：「Jさんと同じで、DVDは男女の仲がよくなるわけでもないのだからやっぱりやめた方がいいと思います」
全員：J、Sの意見を聞いてDVD鑑賞を取り下げる。

ある。自分の思いと違う結果になってもそれを理解し実践に繋げようとする態度が見られる。また、Kは話合いの結果他者の案である「ジェスチャーゲーム」を担当することになったが、系のメンバーと協力してゲームを進めることができた。また、集会後のふり返しシートには、楽しく参加できたと感想があった。

このように、児童は自分の考えを主張するだけでなく、少数意見にも耳を傾け、相手のよさに気付きながら解決に向けた意見の交流がなされ、折り合いを付ける集団決定ができたと考えられる。そして、自分の考えとは異なる結果になっても理解し意欲的に参加しようとする気持ちが読み取れた。

(2) 自己を生かす係活動はできたか

児童に自己有用感を育むためには、話し合ったことを実践し、「人の役に立った」「人から認められた」といった感情を他者を通して得ることが必要である。その為に、本学級では8つの係が4、5名の構成メンバーで活動しており、各係を学級の生活づくりに必要な係として意識づけてきた。今回は、話合いで決まった「係活動パワーアップ作戦」からの常時活動における変容と「お楽しみ会」や「3年生に係活動を紹介しよう会」の2回の集会活動への取組みから検証する。そこで、自己を生かす係活動として図2の話合いのサイクルに示した「個々の役割意識」と「集団の協働意識」に視点を置き検証する。

① 常時活動における変容（係活動パワーアップ作戦から）

これまで、学級では話合いによって結成された8つの係が4～5名のメンバーで活動を行ってきた。結成後、すぐ活動計画を立て常時活動として取り組んできた。しかし、活動が始まって1ヶ月余り経ち、次第に活動が停滞したり、疎かになる係が見られるようになった。そこで、係活動を見直す機会として「係活動パワーアップ作戦」の話合いを行うことになった。ここでは、学級の生活上における諸問題を考え、課題を共有し、学級をよくするために各係では何ができるかを話し合わせた。その時の話合いでは、一人一人が前向きに係活動を見直す姿が見られた。

話合い後の活動から、「4年2組をキレイにする会社」はこれまで、放課後3分間ほうきを並べたり、エプロンを整頓したりする計画を実践してきた。しかし、今回の話合いで改善点がないか話し合った結果、廊下の雑巾掛けが乱雑であることに気付いた。その後、役割を分担し新たに放課後の活動に付け加えることになった。その結果、廊下が以前よりきれいに整頓され気持ちよく通行できるようになった（写真5）。

その他にも、「学級を楽しくさせる会社」では、「休憩時間みんなで楽しめることはできないか」とイベントの企画を思いついた。その後、帰りの会で学級のみんなに呼びかけアンケートを実施することになった。また、「給食係」は、給食の残量が多いことに気付き、残量を減らす呼びかけだけでは不十分と考え、完食調べ表を掲示し給食を残さず食べた児童へはメダルを贈るなどの工夫が見られた（写真6）。

このように、学級の生活をよくするための話合いを各係ですることによって、児童自ら学級における諸問題に気付き、考え、行動を起こす主体的な係活動を行う姿が見られた。

② 個々の役割意識について（お楽しみ会から）

これまでのお楽しみ会は、一部の係が計画や準備を行い、みんなが計画されたレクに参加する集会活動だった。そのため、半数以上の児童が、受動的に参加している様に見受けられた。この問題を改善するために話合いの結果、全ての係が役割を分担して全員で会を行うことに決まった。その結果、

表5 話合い後の児童の感想より

K：自分たちの望む係ではないけど
頑張りたいと思います。自分自身も頑張ってとってもおもしろいお楽しみ会にしたいとおもいます。



写真5 放課後の活動



写真6 手作りメダルの贈呈



写真7 係の進行によるお楽しみ会

これまでとは違って、一人一人が役割をもって集会活動に参加することになった。

掲示係は、「お楽しみ会」で教室を明るく盛り上げるために黒板や壁に飾り付けを行うことになった（写真7）。そして、休み時間や放課後の時間を利用し輪飾りや花飾りを自分たちで作ることができた。しかし、期間が短いことや時間が十分とれないことに気付いたKやSは、家でも飾りを作ってくることを相談し実行した。その結果、会の当日には多くの飾り付けができ、お楽しみ会を盛り上げることができた。同じ掲示係のMは、感想に自分が役割を果たした満足感と他者の行動を認め賞賛している記述が見られる（図5）。その他にも、おとなしい性格のTとRの感想からは、普段できない活動がお楽しみ会の係活動を通してできた喜びが読み取れたり、Nの様に主体的に会へ参加できたことが読み取れる（表7）。

2回の集会活動後のアンケート結果を比べると、「自分の役割がわかり、やるべきことができましたか」という問いに対して、2回目は、8割以上が「とてもよくできた」と回答し、残りも全員が肯定的な回答をしている（図6）。

このように、「自己を生かす係活動と話し合いのサイクル」を取り入れた指導の工夫を行うことで、集会活動においても個々の児童が、役割を自覚して、他者と協力し合いながら係活動へ取り組む姿が見られた。

③ 協働的な活動について（3年生に係活動を紹介しよう会から）

給食係は、話し合いの結果3年生に活動内容を短い劇で紹介することになった。5名のメンバーが協力して、廃材の段ボールを利用して食器などの小道具作りを始めた（写真8）。その後、ナレーター担当や劇担当、クイズ担当などの役割も話し合いで決め、教室の隅で何度も練習する姿が見られた。発表の当日は5名が協力して係の仕事を実演で紹介し、クイズで3年生を楽しませていた。（写真9）。

連絡係は、会を進めるために、3年生の案内をする事になった。一人が、入場の時の音楽を担当しBGMで雰囲気盛り上げながら、他の児童が3年生を教室まで案内し前もって準備した座席に誘導する連携が見られた。その他の係も、会の進行、教室の飾り、黒板の板書などを話し合いで分担し準備を進めた。その結果、当日は教師の指示を受けることなく最後まで児童個々や各係が連携しながらやり遂げた。

このように、「3年生に係活動を紹介しよう会」では、話し合いによって、児童が役割を自覚し、目的を達成するために他者と関わりながら協働的な活動を行う姿が見られた。これは、図2の話し合いのサイクルで示した「実践の場面」での自己を生かす係活動といえる。

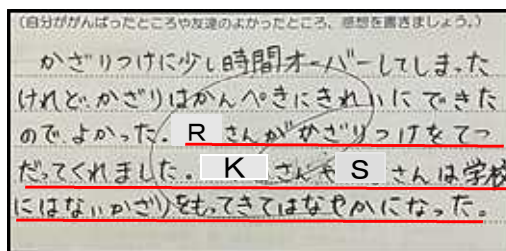


図5 お楽しみ会ふり返しシートのMの感想

表7 お楽しみ会後の感想

- T**：担当のゲームのルール説明するとき一人で読んだのではずかしかったけどできてよかったです。
- R**：自分の役割をやって行動をきびんにしたり、ゲームの説明をちゃんと聞けてよかったです。
- N**：自分は、終わりのあいさつとジェスチャーゲームの係をしました。最後まで全部のことに取り組む事ができたのでよかったです。

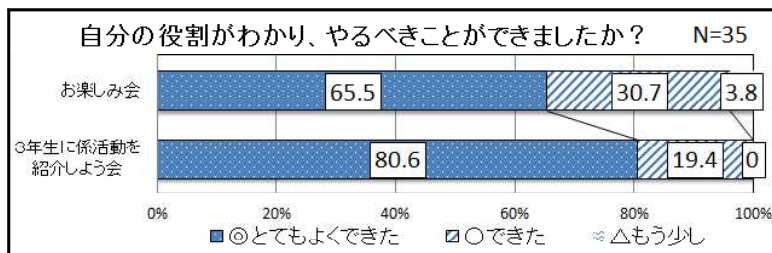


図6 集会活動についてのアンケート調査



写真8 発表のための小道具作り



写真9 5名が連携した発表

(3) 自己有用感の高まりは見られたか

学級活動における児童の自己有用感の高まりを、これまでの話し合いや係活動での表情や態度、活動後の感想から振り返りまとめることにする。

まず、話し合い活動においては、課題を共有することや、みんなが意見を発言することに課題があった。その課題を改善する一つの手立てとしてホワイトボードの活用を試みた。その結果、児童は写真10の様に頭を突き出して一人一人意見を出し合うようになった。さらに、全員で行った話し合いにおいては、出された多くの意見の中からよりよい方法を見つけ、解決に向けた集団決定を折り合いを付けて行う様子が見られた。そこには相手のよさに気付く発言もあった。このことから、児童らは図3で示した主体的に話し合う児童像へ近づいているといえる。

次に、自己を生かす係活動の話し合いのサイクルを取り入れることによって、係活動でも児童の変容が見られた。常時活動では、無意識のうちに行われていた当番的な活動から、学級のために役立つ意識的な活動へ変容した。その結果、他者からありがとうメッセージを受け取り、仲間から必要とされ、自分も役に立っていることを実感したようである(写真11)。また、集会活動においても受動的な参加から主体的に参加する態度へ変容している。

これまで人前で発表したり意欲的な態度が見られなかったHも変容が見られた児童の一人である。集会活動「3年生に係活動を紹介しよう会」では「係の説明」を学級の代表として自ら引き受けていた。また、放課後残って原稿を書いたり、発表のために原稿を覚えていた。そして、発表会では全ての原稿を覚えることはできなかったが大きな声で読みあげ、自分の役割を果たすことができた。発表後のHは3年生からの拍手にほっとした様子で笑顔も見られた。Hの感想文からは、下級生を前に自分の役割をやり遂げた自信と、進級に向けての新たな意欲も読み取れる(図7)。

以上のように、主体的に話し合い、自己を生かす係活動を通して、図1の「自己有用感を育む係活動」で示した、自己のよさや可能性を集団の中で生かしてよりよい生活を築いていこうとする自己を生かす能力や、児童が協力し合って活動の目標を設定したり、自分の役割や責任を進んで行おうとする自主的・実践的な態度が見られた。その結果、「人の役に立った」「人から感謝された」「人から認められた」といった自己有用感が高まったといえる。



写真10 全員の意見を出し合う

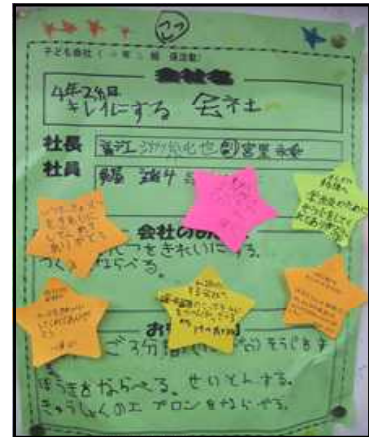


写真11 ありがとうメッセージ

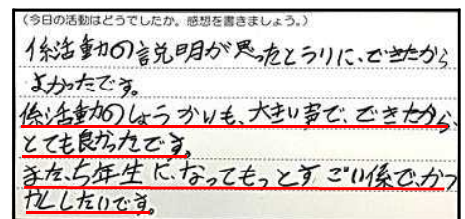


図7 係の説明をしたHの感想

IV 成果と課題

1 成果

- (1) 話し合い活動において、ホワイトボードを活用することによって、課題を共有し意見の交流が高まり、主体的な話し合いができるようになった。
- (2) 係活動における話し合いのサイクルを意図的に取り入れることで、児童は役割意識を持ち、集団での協働意識が見られるようになった。
- (3) 実践を通して自分の役割を果たしたり、他者から認められる場をつくることで、児童に自信と新たな意欲が見られ、自己有用感の高まりが感じられた。

2 課題

- (1) 自己を生かす係活動と話し合いのサイクルを効果的に位置づけた年間指導計画の作成。
- (2) 主体的な話し合いをさせるための思考ツールなどの工夫。
- (3) 学年に即したホワイトボードを活用した話し合いの進め方、まとめ方などのスキル指導の工夫。

〈参考文献〉

- ちよんせいこ 2015 年 『ちよんせいこのホワイトボードミーティング』 小学館
- 杉田洋 2013 年 『自分を鍛え、集団を創る特別活動の教育技術』 小学館
- 文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター 2013 年 『楽しく豊かな学級・学校をつくる特別活動（小学校編）』 文溪堂
- 岩瀬直樹 2013 年 『よくわかる学級ファシリテーション③』 解放出版社
- 菊池省三 2012 年 『菊池省三の話し合い指導術』 小学館
- 文部科学省 2008 年 『小学校学習指導要領解説特別活動編』 東洋館出版社
- 文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター 2011 年 『評価基準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料（小学校特別活動）』 教育出版株式会社
- 明治図書 2001 年 3 月号 『特別活動研究 係活動レベルアップ・再編成のヒント』
- 岸田元美 1991 年 『学級話し合い活動の指導方法』 明治図書出版
- 杉田儀作 1985 年 『特別活動実践論』 ぎょうせい

〈参考URL〉

- 京都教育大学教育実践研究紀要 第14号 2013 年 『子どもの思考の可視化のための共有ボードの活用』
<http://cert.kyokyo-u.ac.jp/journal14/12.pdf>